



名人のおもひ針

札

千  
1082  
1



門子多4  
1.082  
卷 1-2



天保十三年六月江戸兩國廻向院  
谷文一郎真跡騰摹



南都法隆寺藏 厩戸皇子豊聰身命  
聖德太子自筆像 四九  
推古天皇廿九年二月廿日  
河内国磯長陵葬





大峯山有由

大織冠鎌足公 五十六  
天智天皇八年十月十六日  
内大臣藤原



右之原圖



明治九年戊辰九月廿八日 蟠川親胤模寫明治五年壬申春獻於 官

朝廻博士有  
誰多辱教天  
文傳最精質  
氏昔年分道  
後金馬玉毛  
耀遺名

安部晴明像

模本  
京都山田阿波双所藏



山名貫義摹

總橫符中長八寸二分

橫書

白

非 顯 一 真 三 本  
非 證 千 如 三 本  
莫 無 十 界 三 迹

豎五寸七分

秦川勝



推古天皇四年丙辰春魏云

此画賛絹地彩色上ニ色紙形ヲトル大サ此紙ノ如シ端ノ方ハ地ニ緑青ヲヌリテ其上ニ処ニ下繪アリ緑青ノ色變シ文字皆剝落シテ見エズ中ニ阿弥陀ノ三字カスカニ見エ字形奥ノ方ヨリ小シ奥ノ色糸形ハ白キ色胡粉地ナリ筆者世尊寺行成卿ト云画者傳來ナシ絹ノ幅地紙ノ横ノ通リナリ右ノ秦川勝像賛余良ノ人井上平五郎家藏安永七年戊戌六月四天王寺奉納ス

天王寺中之院摹寫

小野道風像

七十一

醍醐朱雀村上帝時人

康保元年卒

明治十七年延八百三十五年

太宰大貳為結男  
正四位下内藏頭

書法妙絕為本朝三蹟之一

亦作画圖見便覽多武峰

護國院藏大織冠神像高野山

小坂房藏執至像并存所画



天満宮神像

梅丘坊無派之流

松本殿中在御所

宗所





侍野永徳兼山崎宗鑑  
 丹後國宮津密嚴寺藏

梅乞訪每四非幸流

和心明年自坤

悲歎

心斷



如圖  
人物  
八百  
萬  
畫  
一  
百  
一  
十  
三  
號



八百萬畫  
巖乃林  
道能為也

此者  
和  
永壽佛  
君賀代者  
巖  
下敷  
袖  
空  
能

小松内府平重盛像  
治承三年七月廿九日四十三



大幅模本  
淡草文庫縮寫  
双幅

右大将頼朝像  
鎌倉  
正治元年正月十三日  
五十三



みちのくに  
かきつら  
よしのり  
石好



右大将頼朝像

宅間法眼

奈良博覧会社

治承四年八月に於て上やまを討といへとも石橋山の軍好して僅ま七騎土肥の松出り  
 志名務ふいりり宗母印し房に小倉のひ湖倚小嶋神の社ありと宗の勢して衆もさ  
 祈念一千返の礼持を命し

みふもと大相宗の流れを宗臣の世に受けてたへくものうへま

かくよみ宗前ふたてまつれま室殿より返し

千尋までふうたのこ石原のたせに受けよ人ものうへま

神ふふ志ありてやたあまのち上総の勢二万余加むきふむり二千方の勢とあり

天下を納めあり此神の告るありとまもく三道にばけこのふみちのくさるに

ありて是徳和尚へ送るうへま

源義経  
鞍馬寺所藏



ア印  
浅草文庫藏

佐藤義清藤原秀衡九代の孫として代に武勇此峯阿蘇家と云れぬ不  
 義清殊に勇氣多し弓射と云をりし二箱之田舎の兵法と通也  
 後鳥羽院に仕へ奉りて北高の事となり從五位下を叙し左近衛少佐せり  
 格の時佐藤義清  
 とし了るを  
 則後又憲法と  
 諸書に云らば  
 宇治友臣親基の  
 の日記に義清の  
 志を云れり云々  
 義清は法するに  
 日本史に記さるる  
 父は左近衛康隆其  
 故物原氏の娘也

蝶舞  
 如所むり  
 舞の形もよ

四位上人像 西行

文治六年二月十六日

七十三

上皇其才成程一たまひく

檢非違使補せを

おほめいふふ職後

固く辞せられ

そつゆの新敷書

障子の和歌即日十首

よとてあつ連 けれ

教感あつ相見九つ流盤賜る

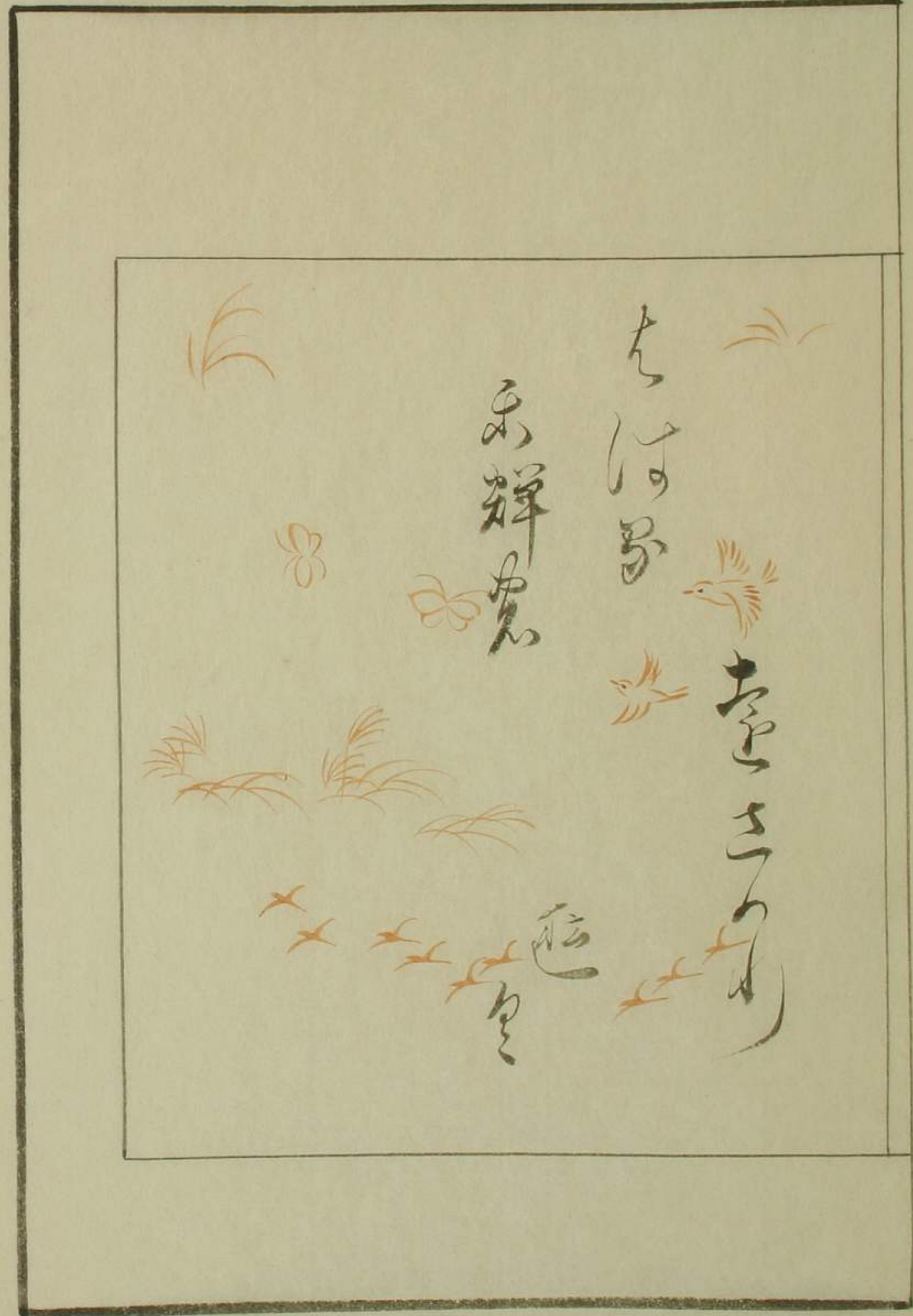
出家の時保延六年十月十日あり

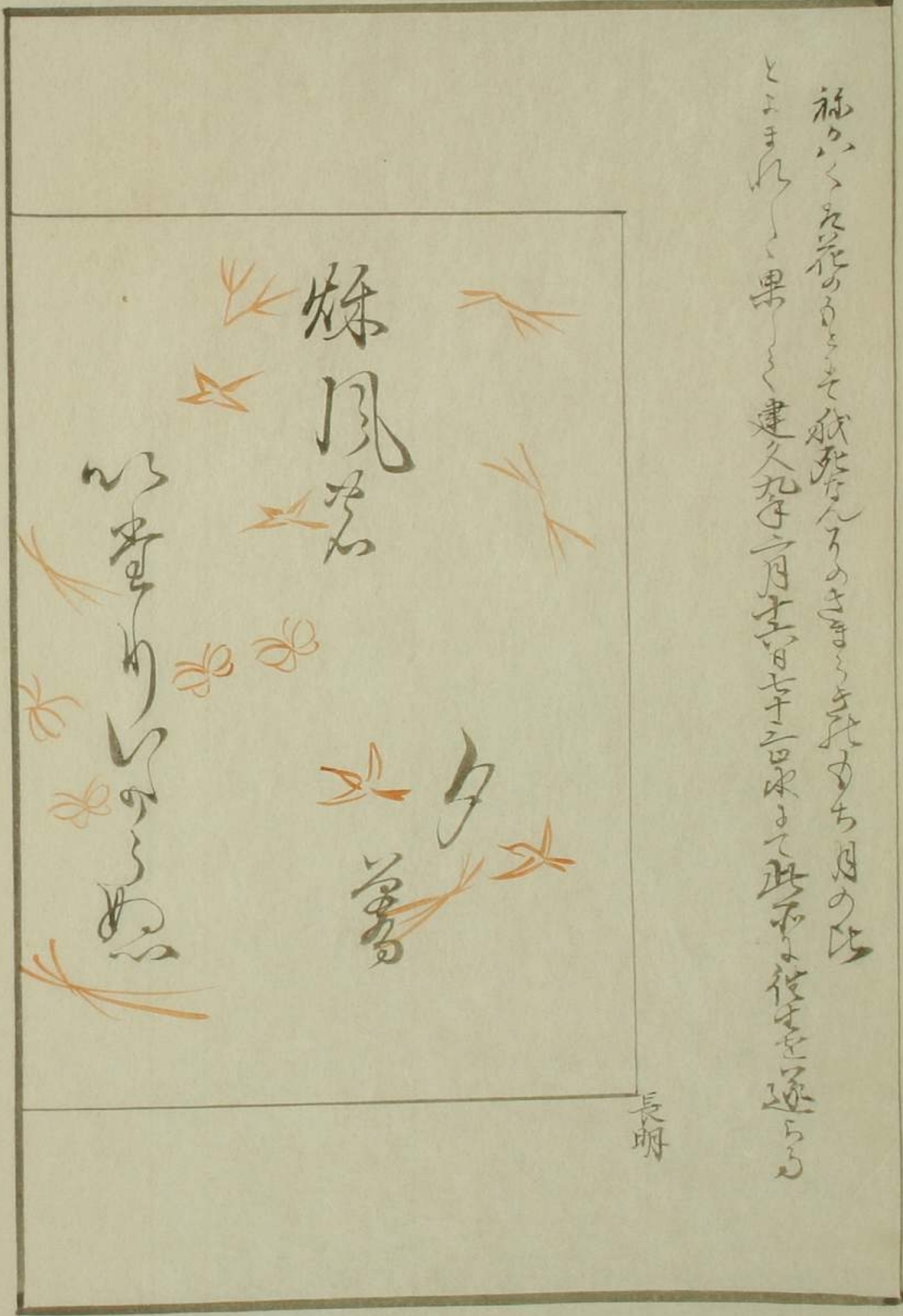
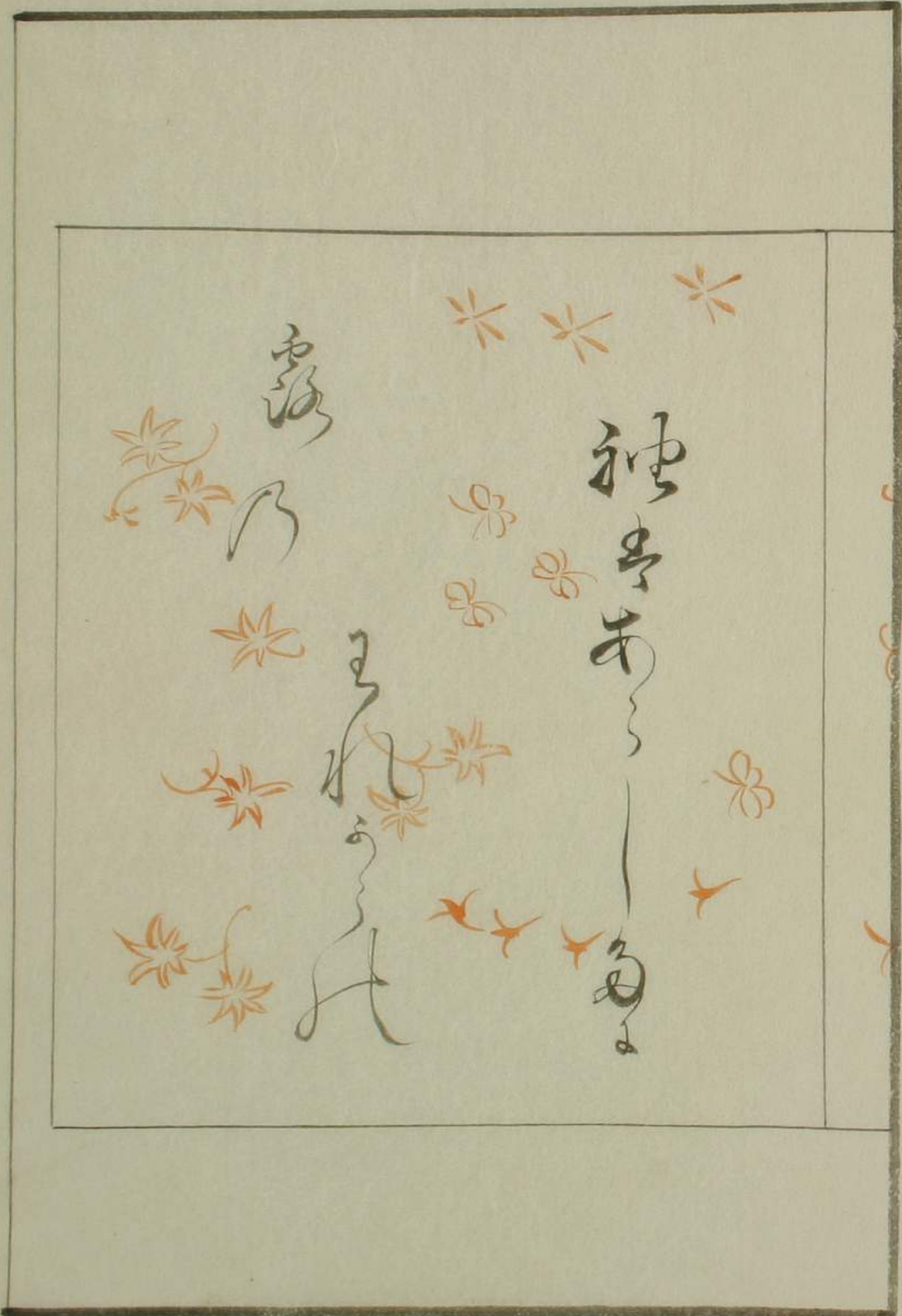
文治の末よ東山の双林寺よいほう院むかひくたよ

如來の心蔵の目録を成さんこと成れむく



左回折ア





鴨長明像

土佐刑部大輔光茂筆

松平常刀藏

鴨社氏人稱東大夫  
法名蓮胤

建保四年六月八日  
六十三

吾身の燈塔十九云

建曆元年十月十三日

鴨社氏人稱東大夫

建保四年六月八日

而令當幕中將軍御忌參彼法花堂

念彌瀆經之乃懷舊之淚在僧位一平之高於堂後

常也本もよみさし秋の氣流くむれ文行抄出風

筆作年表抄中事物語道記八史朝台邊人出時之專記

方丈の記八懷倉りたり一史年の傳

原下傳下



從三位中将橘正成肖像

建武三年五月廿五日

四十三



武藏前司貞將肖像



本朝畫纂抄出

北條相模守平時賴  
 明寺寧元菴寓建長寺  
 教曰參禪醒後圖所夢  
 書偈而述  
 修理亮時執權後出家名道崇  
 禮曰弟子兩年前夢一僧  
 見尊儀典後無異輒長月

縱一尺三寸五分橫八寸五分紙本

鎌倉四覺寺傳崇什物

幾處包思

コハルカカ

カ

頼元子

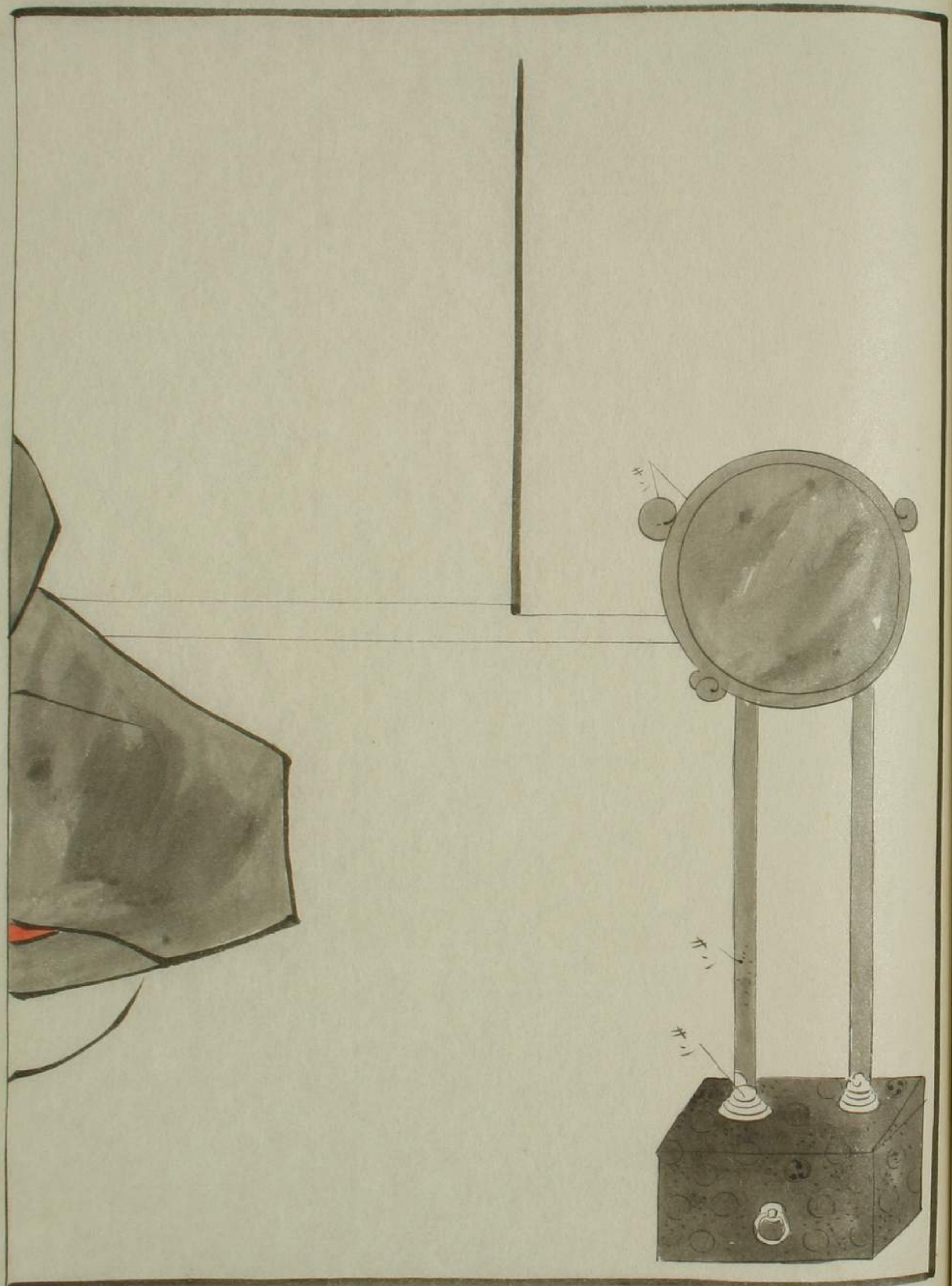
系

カ

此の本末  
 不字宗  
 彼公太  
 不是一  
 笑仍有  
 我亦若  
 你第阿  
 方方佳  
 左角面







時頼ハ方民を哀ミ諸国の地路を非道も必あらんと由とを行拂ヒテ  
 吾妻を志し藤原小陽りて後足をつたてて後人畏れく取付る  
 出雲の阿波浪を多し其家に漏る此屋一旗中屋を押し在れしを  
 語る時頼持佛の位牌のうらみ  
 高懸の鏡  
 一榎打碎  
 大道坦然

三十七年  
 行年二十七歳卒を 辞世

足利義政像

延德二年正月廿六日薨五十六



土佐刑部大浦光信朝臣畫

說破宮花本無色相不現  
色相以何供養溥百千年  
一日想像嗟乎此即師之  
凝思於詞藻之時擬毫於  
霄壤之際這般模樣若  
夫所蘊蓄者自在有情

雲舟



若等揚字ヲ以テ行リ号雲谷軒備中人備溪舟  
文龜二年十月十日行年八十三又永正三年八十七歳三寂云々  
号米光山主

文明元年明リ辞朝  
三二天守二分

弘治二年

宜野上者也

弘治丙辰歲舟幸春日八日

天府第一名儒士秀才青

霞沐年替出

自笔寫身像付共等觀藏王西兩天宮第一座  
雲舟七十一歲冬

天化三年三月四日文晁騰摹

弘安五年十月三日  
行年六十一  
池田本門寺  
葬



文化四年七月身歿山久遠寺  
於江戸赤川寺空閑庵  
奉尊祖師木像寫此其支辰

静勝軒道灌

太田左衛門大夫特資

文明十八年七月六日  
享年五



十二夜在寺时初修武紅少机の  
塔路の時小机主の弟の初とつらほに  
活とちりく小机ん

小日向金剛寺所藏



藤原盛直



頻發好矣 見於皆登陶朱富伯氏清人所羨者 集以大成  
 德宇霸 髮錄單 老之益壯晦之辨明世當澆季 猶存典刑  
 入先師室 受其法兵 顧心禪侶結文宗盟 真浩不二 道順從橫  
 或祗眉秀 雖測前程不讓絳縣定配先彭 胎厥後腐門彙蕃棠  
 昔永正十一年龍原乙亥季春如意誅白  
 前德持荏夢光初幻申端秀暮齡七十書于德雲禪寺之丈室  
 上右文アリ

編本監定守八分  
 三尾守

友人  
 谷文一郎藏



集古十種所載伊達宗城藏



豊臣秀吉公 東山阿彌陀峰葬

慶長三年八月十八日

行年六十三

露止置露止消奴留我身哉  
奈仁波乃事浪夢乃世乃中

小田原出陣三富士山

都々々聞ハエの如きありて  
吾身ハたゞ此世の根の根  
天正十六年四月十五日取巻所  
より川代の君のみも知られぬ  
みどりどきと記のきなり玉水

鹿苑兼光 □

慶長四曆仲春十日

志不獲辭謹贊

一語感不忘忠義之

大相國身定蒙書

富田左近將監給

真丹字彙  
河風来亭  
有威石儀  
儼然迷像

長四尺寸

詠二首和歌

そらの福をいふ者  
と月をみればおかけし  
ふし聖山を礼のさうのを  
みみ流るるを  
はる秋ちきぬる世  
らるる風を好むる  
よしのやまを礼はつた  
雲とらるるを

心好む



上三前、和哥アリ自筆ナリ

# 豊太閤像 古永徳真跡

文政十二年三月廿日焼失  
三翁田伊 摹本 浅草文庫 模  
明治十四年四月廿日



明治十五年四月模再

和歌をもく 詠みふゆ急 柳林出き 伏見山下 草花あきつらき  
あれ此業のいかり 淋しき 小人こそとらぬ 山あり 水あり

卯尚産者にうたふ恋

必ひ病の 恨み 易き かなの 中らん こゝろ 何ひ いたる 手 程 此 由 免  
世の中は 是れ ちか ちか 正 なる かな

西條と ちり せつ なる 消る よう 宇に 何と の こと なる 心 あり らん  
吾 理 山 籠 と あり とな け かな 今 宵 も 花 の 蔭 下 也 ね らん

淡草文庫模藏

武田晴信像

法名信玄 五十三  
天正元年四月十二日

高野山成慶院什物  
道遠軒筆



立ふぬかひを分けれ山さ  
初より年の色はふらふて

武田大膳者更入道ハ世若者多し其人の志す所あり又和言より  
よく詠り松竹の花の散るを立ふらふる言詠又人はあはれ軍師あり  
いふさまの物名あつて大膳の石鏡の詠ふちまたあり  
一戦の日より時よりまじりの起物人をかけても事をもろくへ  
人の城人の石垣人たふりあさけは味方あつたあり  
又後河原向のたふ法名は関北月をあつて空山も関のあつたあり  
まゝくも月をさめめくあつてくひ  
法名は信玄も世若者多し六月をさめくひのねのねあり  
辭世  
大抵還他肌骨好  
不塗紅粉自風流

平信長公像

織田信長

天正十年六月廿四日

古永徳筆



此の如く月小のまの浮雲に  
去へぬけしは方乃秋風

織田信長公備後守信春の二男小の尾羽か出之武者を法山より東に  
越前公長昭公を逐へし是利家再興の補佐と号し之が  
佐之永兼頼三好一の孫子に任ぜを改元山門根来の悪僧を  
討滅并朝倉をも平らけし上洛の友位を并進して徳代御友  
子も叙爵をぬけし以て中々之者歎とありて信長公は法利  
を智を折つて連歌師銀也も悪僧小出守子に奉養小の世に前小  
まにけりこまりて銀也

にんふみりけふのうらこひに  
舞花小千代よりつれの舞を  
附させぬ銀也小ひたて物多  
る分や久く是を愛せし只荒く  
鬼の如き大羽とのと思ひし優  
美のりも銀也と成りしとあり

宮本武藏範高自筆像



小倉人有武畧善劍法旁通  
繪事工人物山水畫中用二天印  
範高無嗣兄某家世仕小倉藩  
今持官本左門



徳川家康公 東照宮

元和五年四月廿七日七十五  
野州日光山大樂院  
安國院殿徳蓮社  
崇譽道和大居士

陰陽の測  
生花の流  
弘誓無佛  
権国の公  
三田伴好  
大徳心天海



天海僧正 慈眼大師  
寛永廿年十月二日行百廿五  
東台 慈眼堂 三六

探幽寺法眼宗

加藤清正朝臣像  
慶長十六年六月廿四日



己とくまをまさ頼公  
号叔賢も妹と春山

京都六條大光山本園寺

淺草支庫模藏

肥後守法正の勇猛ハ人のあると本丸に注せを朝鮮降陣之後  
大関法正の軍功を譽しぬん法正一人を茶席へ召し大関水典  
弟あり叔水茶海之後法正の曰君の小子前元年將兄仕りよ遠志  
此上遠程されれとやせ油市の手あを全く唯善なるあん此言を扱  
此水法正の承り志意の通り茶道に不棄内小丸へとも定年此子ハ人  
將兄の命ハ幾友も下程とあらせんと存小遠百に此座ハ人今日の  
小子まへ少くも此遠是るくされ此上遠とやあけしとあれハ大  
関此手ハ人此汝さるく武変は油取有死るが感心と有也  
似来此川の持込とやあへたと此心ハあり  
此のよハ花もある祝をありと英雄法正記小丸人より

金木林宗起像

下着二重共白ク、リ上着紺青  
 金泥曲十ト、黄淡赭ク、同文雲母  
 同紋濃墨金泥糸目  
 腰指也、敷白金物金泥  
 同紋茶色  
 袴白雲母曲

飛彈守重近  
 明曆二年十一月十六日没七十三



七年正月摸

利休

名宗易号、茶齋、松納屋子四郎  
 思ひ、日三十九年  
 姓田中氏、後改千氏、仕豊臣家、領三千石、泉州堺産  
 勅賜居士之称、天正十八年二月六日没七十四、若年千阿弥号  
 自紹鷗傳授、遠三茶道中興之祖トス  
 門人甚多、其一流聞、モノ各下ニ出ス

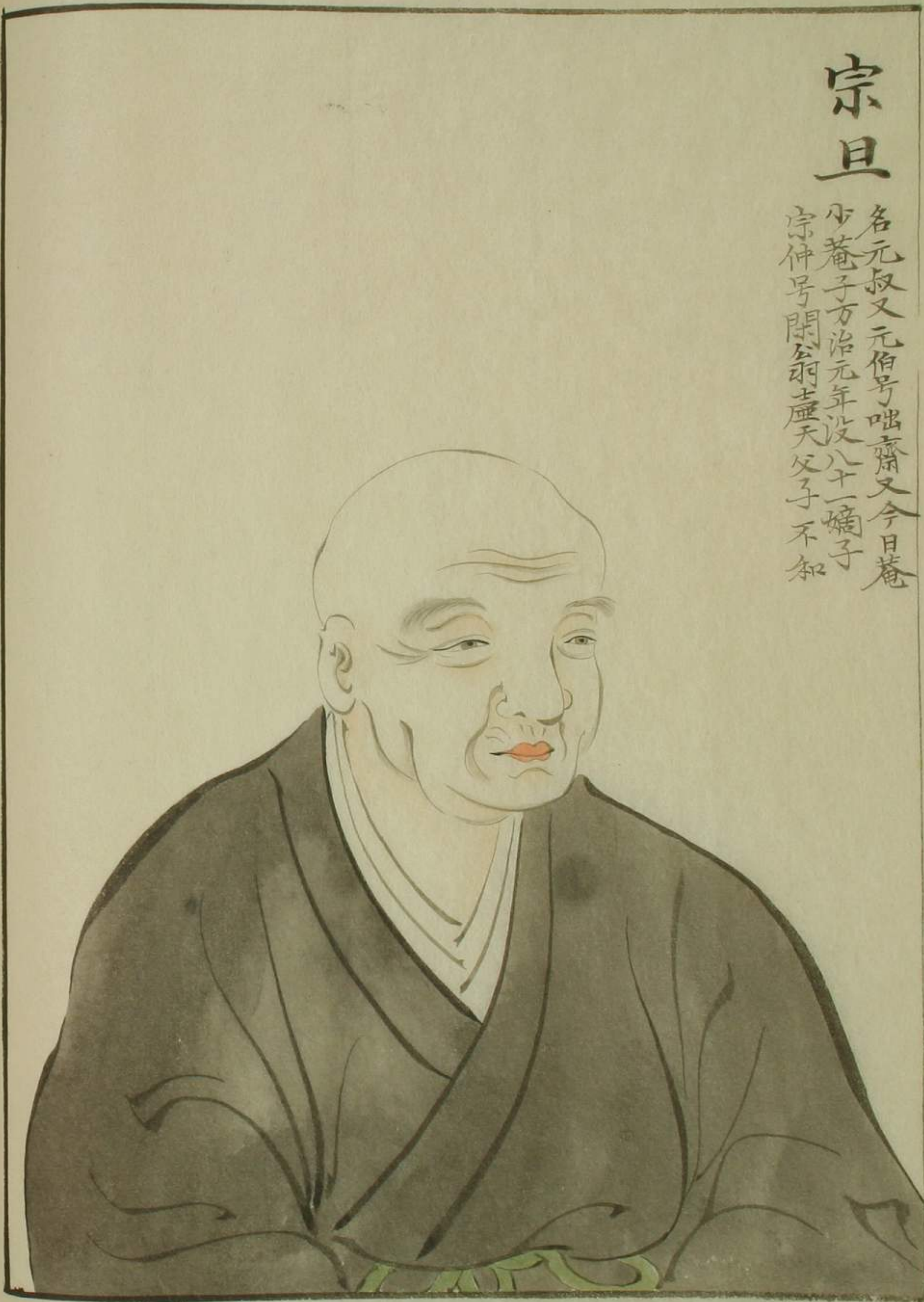
茶の及きも秋、  
 花を兄を待てん、今山里の電百多子の茶を兄せし也  
 東山殿古器下画を好み、分より  
 便宜となり、又豊天閣の一茶集て  
 國那をよと、穴た切居、千金の  
 笑物をなつて、人心を法入為め  
 凍斗あり、流世をなつて、茶を  
 するよ、悉も、行り、金銀を、  
 得が、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
 三金、心、持、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
 道其好む、その、た、た、



深川曲佳筆、寛政三年八月十六日没七十一

宗旦

名元叔又元伯号咄齋又今日菴  
少菴子方治元年没八十一嫡子  
宗仲号閑公羽虛天父子不知



不審庵宗徧翁像

筆者不知

山田氏号四方菴於江戸没  
元伯宗旦門人 同門有僊首  
号木遠菴龍安寺大珠院僧又  
有士齋者宗旦へ出入左官ナリ



一休禪師

大明末朝

曾我秀文二男

飛騨國住

一休和尚号宗純

京邦此紫野大徳寺住

文明十三年遷化ス

十月廿五日

阿保院の画像、疑はれぬハ

汝在素願 我在一願

素願とハ四十八字の分字ニル



東京地學協會報告 第二卷中模寫

山田仁左衛門長政

自ツカラ云フ織田右府ノ後ナリト

山田ハ織田ノ別姓ニメ本國尾州スナリ



一天竺征々ハ物語ニ山田仁左衛門長政ハ  
播州山田津所ノ子代也シカ武州江戶  
東ニテ徒ラテシラ以テ御吟味ニ逢ヒ  
テ長勝ニ逢ヒ彼地ニ往ク云々  
漂泊ニ駿府ニ來リ知ヒテ求メテ馬場町ニ  
寓スル十餘年然レテ市井ノ産業ニ當  
リテ爲人任使ニシテ仕官ニ好マズ常ニ人ト共ニ兵法ヲ談スルヲ以テ其樂ニトス  
朋友之ヲ諫テ其生業ヲ管マンコトヲ勸ムレト聞カズ然ルニ其性直實ニシテ  
才年アリ故ニ人多ク之ヲ親睦ス愛シ我國中古ノ末寛永中頃ニ至ル迄ハ  
異國通船自由ナルハ京都大坂奈良泉州堺長崎等リ唐渡ト称シテ



交趾暹羅東京東埔塞西洋等國之渡航ナルモ多シ皆肥前長崎ニ於テ商船ヲ整ヘ毎年海外ニ往來セシ商人  
二十余家アリ元和ノ初年ニ當リ駿府商家滝佐左門太田治郎左門ノ兩人唐渡リシケレバ彼ノ山田長政モ亦  
之ト俱ニ渡海セシト望ムト日頃流浪ノ身ニテ敢テ其ノ産業ヲ管マシ且其志操尋常トザラテ以テ俱ニ行ク  
トモ商家ニ益ニシテ其同行ヲ肯ハス故ニ途ニ臨モ彼ヲ誘引セズ長政早クモ其意ヲ悟リ先達ニ密ニ提而大  
阪ニ至リ滝太田兩人ノ未ラ待ケラテ迎ニ便船ヲ搭セシテ請フニ人止ム得スニテ之ヲ許シ航シ大灣ニ至ル商事終ニ及  
ニ長政彼地留シテラシテ兩人其意ニ任セテ歸朝セリ時長政年ニ七十五ハニハ歳ナリ(暹羅國凡土軍記)

暹羅國山田氏興亡記(一) 慶長元和ノ間ニ閩ヶ原大坂等ノ落武者多ク商人ト也テ渡海ノ商船ヲ打テ棄リ其身ヲ外  
國ニ隱セシモ多ク本邦 武名之ヲ為海外ニ著明トシ諸蕃海賊等ノ日本ノ恐レトシ恰モ鬼神ノ如シ依暹羅國王モ亦  
日本ノ尊敬シ其王城ニ於テ居留屋敷ヲ興ヘテ日本町ト名ケ數百軒所家ヲ建テテ其妻子ト共ニ此ニ住リ日本廻船  
代代ニ此地ニ往來セリ(暹羅國凡土軍記) 此時國王ノ弟謀叛シテ王位ヲウバハントス 中畧 燈前夜話時暹羅王在留日本人  
招キ余曾ラ聞ク日本人ノ能ク兵法通ズト此度大難ヲ救フヤ術ナキト時長政進ニ出テ我等ハ日本商ノ類トシテハ三百人余  
此地ニ在リハ從令敵軍何十方騎アリトモ我等ニ任シ給ハハ再ニ攻メテ未ナルヤハ謀フバト答ヘケバ暹羅國モ長政言ニ從ヒ  
今度軍事ヲ以テ日本人ニ往セケル敵ハ暹羅ヨリモ暖國ニ皆裸體ヲ責メテ打物唯介山刀ノ類ヲ用ヒ味方ハ甲冑  
身ヲ鎧ヒ名ヲ以テ渡リ合ヒ無ニ無ニ三戰ハ一下支ヘモセズ敗走セリ(長崎記) 長崎事始細見録 始長政暹羅至  
リ此日本町ニ留テ屢々彼地ノ官人ト會話ス長政生來才智アリ粗々日本ノ軍法通シケレバ經書軍書及ヒ和漢物語ト下談  
シケルニ官人等皆大ニ長政ヲ尊敬セリ 元來暹羅ノ西南夷ノ一部ニシテ曾テ支那ノ文學モ傳來セシ經學禮義士ヲ往來セシ  
ナリケレバ耳新ニシテ經書軍書和漢軍蹟ヲ聞キ深長政ノ才智感シ大ニ之ヲ稱美シテ之ヲ國王ニ奏シケレバ國王長政ヲ  
召シテ友夷文武古今ノ事蹟ヲ圓ヲ深シ其才能ヲ感シテ遂ニ之ヲ登用シ官人トシ其食邑ヲ給スルニ至リ之ヲ本邦  
俸祿比シバ凡ソ三十石ニシテ云フ其後屢々昇級シテ太子ノ師範トシ時寛永四年也又幾クモシテ遂ニ三万石ノ  
領主トシ長政則日本町諸商ノ集メ郷等日本ノ歸ルベキ心ナク余カ臣トシテ思フモノハ何レモ召抱ヘシトアリケレバ諸浪人皆大ニ  
之ヲ悦ビ多ク長政ノ家トシテ長政其善ヲ撰ニテ其職ヲ授ケ勇士甲余人数百余人馳卒中間二百余人ヲ得タリ何レモ

日本風ノ形装ヲ飾リ園薄堂トシ此度封セラレタル地ニ入ル暹羅人見テ大ニ驚キ其ノ長政武威ヲ感歎  
セリ其後一年ヲ經テ都城ニ述職シ常ニ國王ニ侍ラテ之ヲ補佐シ其職師範トシテ政務多ク長政手出ツト云フ  
中略

又夕當時長政暹羅ノ信使ニ托シテ我カ執政ニ到テ所ノ書ニ曰ク  
乍恐秋奉書上候爰元從屋形  
御上様迄以金孔被申上ニ條萬々  
御上様可然様ニ御取成奉願候為使者暹仁二人立伊藤久太夫被差遣ニ條乍恐可  
被尊意候爰元從屋形  
御上様ニ御進物以注文申上之條御披露奉願候隨而之少之儀ニ御座候得共般二  
本鹽硝二百斤致進上候態奉御祝儀許候誠惶敬白  
元和七年  
山田仁左衛門  
長政在  
從暹羅國

進上  
大炊様  
御小姓衆中御披露

又夕我カ執政ノ答書ニ曰ク  
音耗投閣  
貴國之西使捧  
王書未  
朝並土宜如件々到來奏上  
大樹源君西使拜禮則賜

返翰叙  
國譯使伊久口陳附之敝貳本監箱二百斤至兩臣惠美厚意多々晒布貳拾疋充投贈  
之聊補空書耳不宣

元和七年  
九月吉辰

土井大炊助  
利勝印  
本多上野介  
正純印

山田仁左衛門尉

(異國日記)

中略

按スルニ此書記スル所ニ依レハ暹羅王、薨スルハ寛永五年、冬ナリ

爰ニ暹羅新王即位、元年ハ寶ニ我寛永九年八月ミシテ

下略

終ニ翌年、春女王ノ二年ヲ以テ長政逸比留ニ卒シケル時ニ寛永十年ナリ

ライン終ニ東埔基國、為メニ戦死セリ之ニ從ヘル人々大塚十左門今村左京明石舍人明石十大夫後及

又六山田仁兵衛連水又三郎等ミテ枕ヲ共ニテ東埔寨ノ原野ニ白骨ニ眼々ニ憐レナリ

下略

コイン長政男

爰ニ暹羅國門閭ニ誇垂カウハムト云フモノアリ其位長政カ上ニ在ルヲ以テ大ニ長政カ身進ヲ嫉ミケレトモ相  
共ニ政事ニ參與スルコト三年ナリ下略カウハム今年ニ十五歳容姿衆人ニ勝レケル王后深ク之ニ惑溺ス

十七年一月尊号

松永貞徳自贊 道遙像 山城上鳥羽實相寺藏

道遊軒貞徳居士肖像 八十三歳

清由純心のみち

清多ころも忠

玉くく

好くくひらきぬ

見たり

念に

上



承應二癸年十一月十五日



柳沢義濃守吉保

正徳四年十一月二日  
行年五十七

奥書

表具修覆寄進主

上鳥羽實相寺常住

延享三年閏十月廿辰日傳

洛立本寺隱居日深上人住

天明六丙午四月修覆寄進

竹越甚兵衛作名岐山安

貞徳ハ長江齋と号て相承禪正久秀の流流ハ大和信譽の城滅守附ハ  
 二父老母の親族ニ養ハ成老の後成老を相承流世ト世ト唱貞徳を唄子返馬  
 把おきてハち能海に在居ありあつたことせむも春ハすかぬ  
 此齋ちま記ごふふとふと香冠りもみ合たり長唄子返馬

ハわあぬもまふあをさふ友はや社社や大海石とさす

は初も香冠りふちま記ごふふとふとあつたことせむも春ハすかぬ  
 の権を切破莫の這入りてんが城守のち能海ハ相承の流流をば返馬りけるとた貞徳

ハかまふまむもあだの若れハせむあぬしくかへるさる浪

ハ相浦りてあぬく月ハ夜中そのまてすてんるん



りけり

同僚と交り常々温和にして其徳を極く敬慕を  
可成し併不若人の深き交り多し必し無用を  
一戯言をいれ中より其極を極し其志を  
一余りし月欲す多し法應を心持可なり  
又と物争ひを止し其意を以て之を  
一毎物候約を守り人々を安んずる事少く  
留めたり

右七条之趣一々実用莫須由又志又其  
作や爾勉め

寛文三年八月日  
石大山

### 石川大山肖像

此肖像大山志願行探海上大山自歌其徳  
如意隠几編褐鳥巾黙々宵顔照々精神交遊造物涵  
養道真六根頑老三陽逸民逸民為誰六々山人

石川氏名西字大山初名重之稱三彌

嘉慶號教稱六火四明谷凸寓

大抵鳥鱗宋山林教里東溪之足

天正十一年生録五百在駿有姓勤

元和後内使番軍人之後

暇賜 鎌書 工 殿山麓一等寺  
村操返す

寛文十三年五月三日卒

其地葬 享年七十  
又山能遊 後和歌詠 京師入 洛陽

来ラカレテ其徳

後らじふ濃見北山川の跡とも老思波ふ新を叙し



荻生徂徠肖像

物茂

荻生氏本姓物部ノ名雙松字茂卿  
稱物部高門號徂來又號園赤城翁

寛文六年生

甲斐後醍醐ノ録五百石賜ワリ

偏修後裁トナリ

享保十二年正月十九日卒六十二

箕田長松寺ニ葬

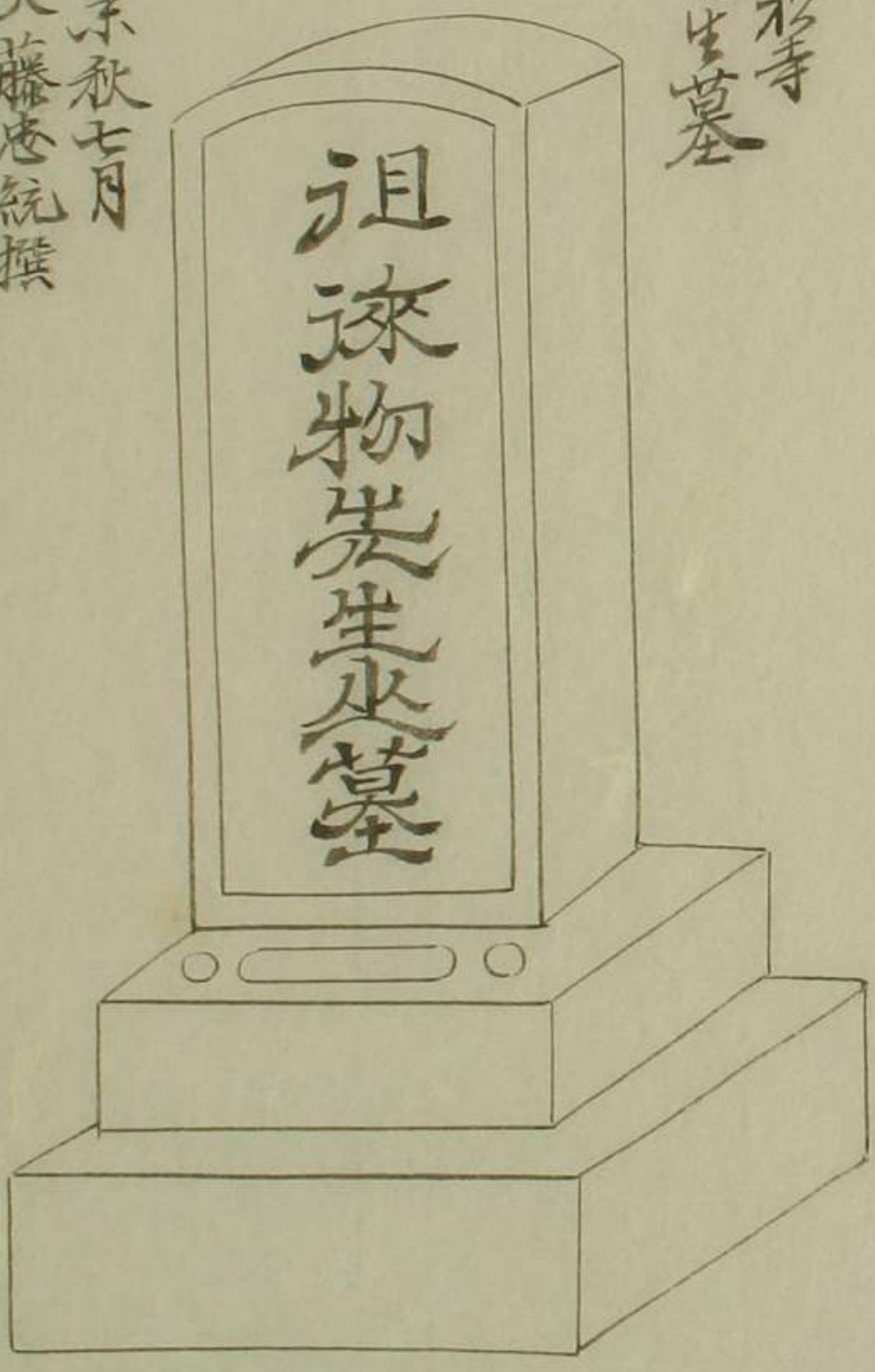
清淨院根與知專居士

徂來一生活一首和歌トテ

我門の五もと柳枝を花と長花日あはらむらひはあふく  
又高師直鹽治妻貽心款ノ立恩ヲ譯セシニ  
我思美人貽之書美人不見棄庭除吾拾吾書歸十襲心謂美人手所觸



三田寺町  
壽命山長松寺  
徂徠先生墓



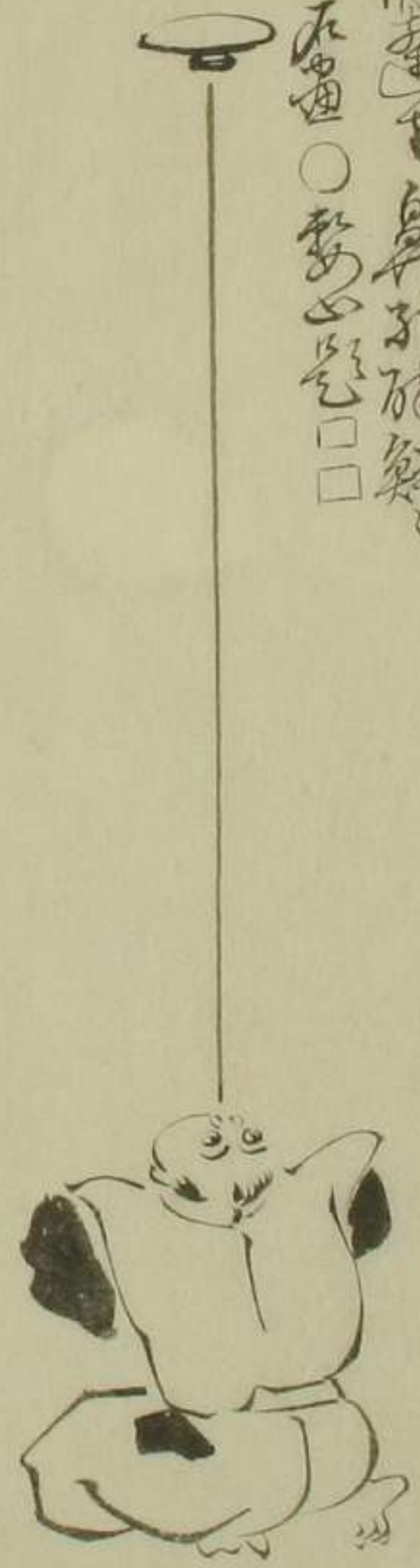
後  
元文四年己未秋七月  
門人  
朝散大夫藤忠統撰  
源君岳書下鐫録アリ畧ス

本朝畫集抄出

章世所共知其畫亦超凡此幅舊太田澄元家物後罹災  
立原翠軒翁摹而傳之

白石學術文

百尺竿  
一登海峯手鼻孔旃旃  
乙未五月畫○勢心堂□□



明治十四年五月 第二回觀古美術會出品 編寫

孫子之望孫古歌孫孫以姪  
兼人多天風以變如飛西白  
日西傳素琴何

保作 白石

新井白石像



淺草文庫藏模本

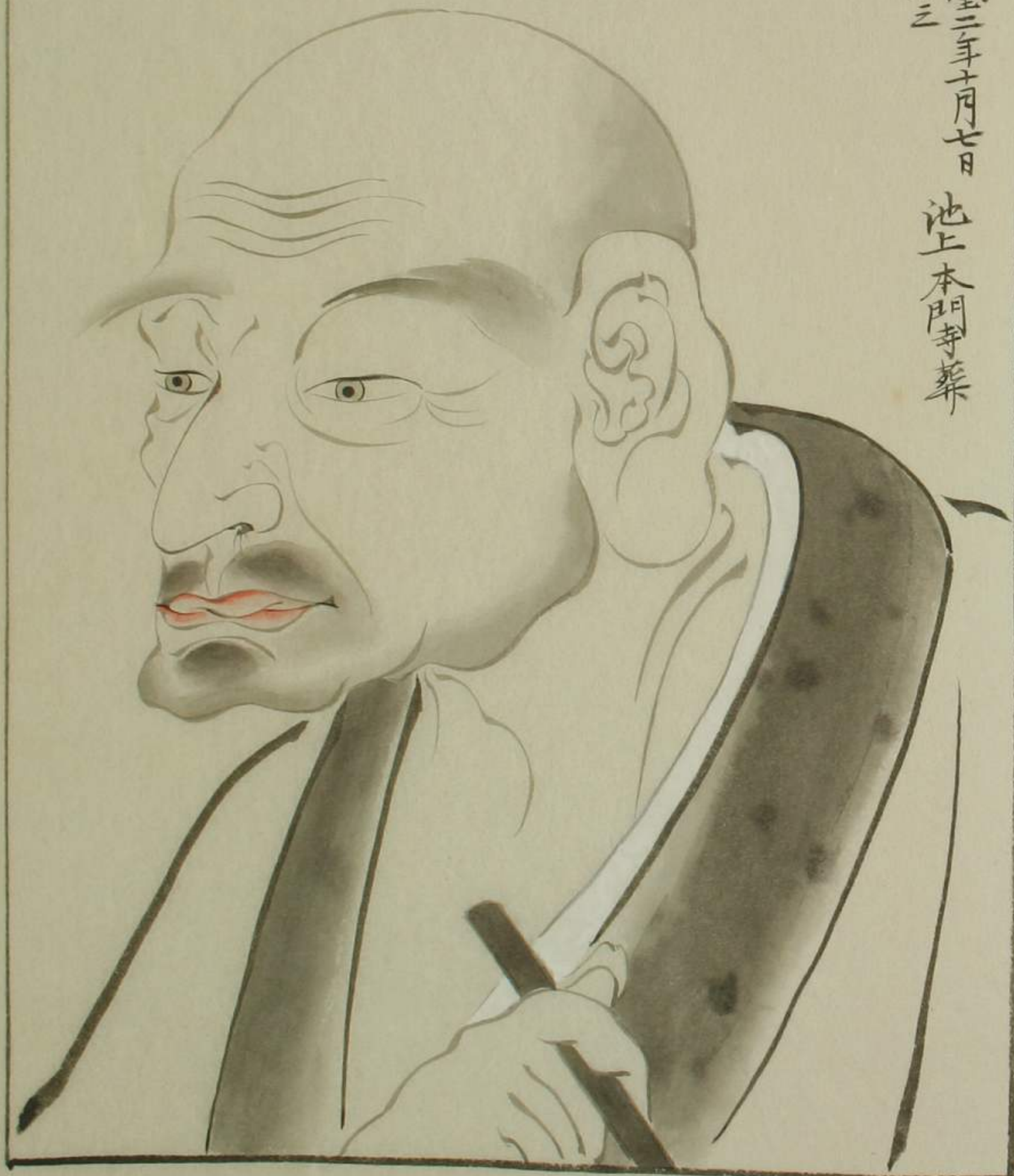
明曆三年三月廿日生  
後 筑後守名瑠君美之十九 慈清院淨覽  
享保十年五月九日卒 淺草報恩寺中高徳寺葬

三尺寺八分

探幽齋守信

延宝二年十月七日  
七十三

池上本門寺葬



狩野勝玉藏



弘福庵是是裝  
戊申秋菊肉

朱白

若直武探幽

龍吟松出似淋妙手神

正園名也如龍飛吐味甚高

宸榜而系性質道天資悠

搏棗益安德上

朱

港堂讀守信後五年自享保十三戊申年九月

十七年八月十八日編圖

將野探幽畧傳

猶野氏名身位探幽と号し白蓮子と稱す慶長  
七年下生隱居又右近將監考位と云ふ佐内  
藏由成改め之弱冠一々宰相と稱し又正印以行  
後不來女と改改髪し一々探幽斎と号す  
禁裏南殿の賢聖の障子を画筆并ひ丹青の妙  
又和歌歌歌一画扇を一畫し満内猶号するも  
更し要倫を一南世画業より著比古氏名稱知を  
學するに方寛永二年法服を任寛文三年宮内  
右法部下卿を任左上法皇に勅書を下し應永  
玉飾を好し号空谷を画し宛あふたりし致居院下  
系一系の石を像とし入し信命し一々和子守養生院と  
賜ふ延享二年十月肯卒在善七年三月白山大衆寺  
下葬又玄徳院前法眼守信日道と諡す

英一蝶像

明治五年七月墓

姓藤原多賀氏名信香小安確  
俗称助之進又治在瀨門幼名  
猪三郎承應元年根而火坂生  
剃髮三朝湖下村  
羽卒養射手丸曉雲菴草堂

一峰閑人閑散陸推菴新清菴  
北窓翁和央和應寺教号アリ

享保九年正月言改行年七十之  
芝三承復承教塔中頭泉院葬



英一靖子藏

英一蝶七十一歳辞世

満ちてはるる世の業の色と何れ  
 ありともや月夜は寸草も此空

傳(原)曲類纂抄玉照録と同様



近松門左門 姓杉森字信盛号平安堂  
 築林子不務山人  
 定教丸中文字 長州萩産

享保九年十一月二十一日行年七十一  
 今我阿彌院親矣日具足居士

浪花八丁寺町法妙寺  
 不徒然焉 期豫自記春秋七十才口口  
 享保九年申冬上旬

の之様と受取りしもの御法からうと出され  
 けぬまあし形跡をみくらさし言

本紙者建仁寺  
 松原中谷氏蔵也

長舟歌の産田高長秋森某の思御世に没録少少一肥前厚津近村寺に遊越前の人なりし  
 後高師より或堂上御世に没録少方小使奉りて爵六位を賜ふ海津秋浦秋屋五祀小一宗禪國  
中義三あり乙丑格より若し中六元祿の以仕友を退く浪人一宗禪國花良公文明  
 名宗高舞妓之長初百方丈又言浪加々極井上檣磨極ぶ為に淨瑠璃を伴ふを後  
 元祿三年二月高浪花下り市本筑後極極淨瑠璃教多英述一宗禪國花良公  
 ちぬ辞世の文戒号ハ世ニ有リ後重なるなり  
 代に甲寅年家系をたむ武林を鞋水二瓶九名も任へ一尺片奉りて寸許なく市井に没る高貴知す  
 隠し似し隠者なる浪人候に候ものより候て何も志らば世のまゝに老庵の文和をへある  
 及に故能雅藝酒習の致進都事あけはみり世筆に一尺片生を嗜りちりし今も隠しいふへく  
 思ふき生と大なる一字半も候し倒惑る浪人の心腹をおもひて半餘の光陰思ふもつなき世  
 経年あり辞世候とふ人あらば  
 それ辞世と候と小叔もその後小のころささるの花一尺片小母を

東洞吉益

安永二年九月廿三日  
 行年七十三

名為則字管 安永人

管領富山政長商賣

若年弓馬劍道哉

医道諳

張仲景を

宗とす

剛強篤実容貞卓絶戒凡諱と  
 して其髮帽毛の如く眼先人を射る  
 字亦張 初字修文字名法字直次と名長  
 長字子良



伊勢平藏貞丈 号安齋 姓平 粹平藏

天明四年六月廿日

西久保

大養寺



儒の唐めたるを笑ふも  
かろくとはいふ人も愚者く  
これに儒者か唐の人此原  
又佛及中もわいふは七十年あつ  
若松の大老なるに死後戒厳二字の外付  
へりしといふ  
言わぬぬ身といふし人なるもよるにわらわらさるるは

風来山人

名國倫 字士昌 鳩溪  
徳富堂又天竺老人又福内鬼外  
初名森羅萬象

安永七年十一月十八日發狂没ス

徳泉寺墓アリ

法号智見靈雄

和漢の書を讀み世を又懐きよき忘れ公著述の由

教多奇人長を貴氏又海より作るふ妙を由

矢に海を川と名をりしある時

女息子を懐か香木を結せし氣

あましく出で去り事定真とあり

早止まるといふ家未香を酒に飲んば息絶する

又子にいふは世に奇事のみみたる

一子の子もなぬわりの子の子も子を思ふはあはれなる

勝をきり花を石にうつして氣をよきに職

あつはる

庚辰一月廿拳

黒老木邨君筆 狩野親信



我考は世に大腕亦は知衆  
せんといふともまはれを愛しといふ

題鴈溪平賀翁肖像

竹堂云三醫  
生作者勞力  
處

天下古今稀英傑。英傑誰是最奇絕。當時唯有鴈溪翁。智術自與  
他醫別。醫國匡家念慮深。醫國維何蔗與獲。在家則立長久策。國  
家經濟夙自任。富強本是在物產。地方種蔗利何限。跋涉山川窮  
真理。看破動植開濶眼。矢口之詞久蕪荒。院本布世忽流芳。越歷  
之器出心匠。象工愕眙何用當。玻璃懷鏡世所便。陶仙口頭煙引  
線。夜叉立門佛夜遁。雲梯架鏡人晨眩。傳家造酢銘松風。數口翻  
來永有功。忍耻入寺人做富。點鍊化金友免窮。火浣布成驚西客。  
誰念綿繆出於石。小豆島中化石龍。水草為解洋人惑。諧歌千首  
四馳名。牽牛花庵友古行。教人常作意表事。奇計一夕誰能爭。乾  
坤吾家磊落士。何為娶妻惡家累。室如懸磬亦晏如。日夕供賓酒  
饌美。折腰何慙斗米恩。拒諫移居究鬼門。只言魍魎徒為耳。何料  
風波坐上翻。一朝奇禍與心違。不免幽囚泉下歸。百載之下誰不  
仰。嗟々天道是耶非。

按園云事奇  
而句亦奇  
橙齊云鬼佛  
針線密

明治十三年一月廿九日

樽丘

柏原謙遜卿

